42

三島由紀夫

現代日本文学館

42

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 42
三島由紀夫

昭和四十一年八月一日第一刷

著者　三島由紀夫
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷　凸版印刷
製本　凸版製本
定価　四八〇円

Printed in Japan　本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

三島由紀夫伝　橋川文三　3

金閣寺　33

美徳のよろめき　188

仮面の告白　280

真夏の死　393

海と夕焼　425

新聞紙　433

橋づくし　438

憂国　451

魔法瓶 468
注解 482
解説 493
年譜 500
挿画 野田弘志

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三島由紀夫伝

橋川文三

I

三島由紀夫は大正十四年一月十四日、当時の東京市四谷区永住町二番地に生まれた。本名は平岡公威、父は平岡梓、母は倭文重、その長男である。妹は美津子、弟は千之。

平岡家は、「世々農業を以って居村に鳴る」とある人名辞典に書かれているように、もと兵庫県印南郡志方村の農家である。以前のことはともかく、三島の祖父平岡定太郎の時から世に知られている。

祖父定太郎は文久三年六月の生まれ、平岡太吉の子である。少年期、神戸の漢学塾乾行義塾、神戸師範学校に学んだのち、上京して二松学舎、早稲田専門学校、開成中学を転々し、さらに大学予備門から法科大学（現在の東大法学部）に入学した。法科大学卒業は明治二十五年、三十歳の時である。

大学卒業後、内務省に入り、各府県に事務官として勤務したが、明治三十八年、内務大臣原敬によって行なわれた有名な地方官大更迭にさいし、大阪府書記官から福島県知事に昇進し、さらに明治四十一年には、異例の抜擢をうけて樺太庁長官に栄転している。

当時の人名辞典、人物評伝などにおいて「白髪内相原敬氏の乾児、否、縦横の活手腕家として、地方官中に鏘鏘たる名声を博したる前樺太庁長官平岡定太郎氏」（「大正人名辞典」）とか、「極めて円満かつ常識の発達せる人物にして、前年大阪府書記官たりし時も、福島県知事たりし時も、威張らぬ人、役人臭からぬ人、調子の良き人、として令名嘖嘖たりき」（鵜崎鷺城「朝野の五大閥」）などと書かれた人物である。

大正三年、部下のひきおこした森林払下げの不正事件に責任をとって辞任したのち、南洋拓殖製糖株式会社社長に就任したほか、種々の事業に関係したが、「人間に対する愚かな信頼の完璧さ」（「仮面の告白」）のためか、事業家としてはむしろ失敗者だったようである。昭和十一年八月、七十三歳で歿している。正四位勲三等というのが、退官時の位階勲等であった。

この人は、その子に近代国法学の先駆者であり、早稲田大学設立者の一人でもあった小野梓の名を付け、その孫（＝三島）には、同郷出身の偉大な土木工学者、枢密顧問官男爵古市公威の名をとっているが、いかにも明治・大正期の高級官僚＝ブルジョアジーにふさわしい快活な明敏さと、幾分洒脱な八方美人的性格とをそなえた人柄のように思われる。

定太郎の妻（＝三島の祖母）夏子は、大審院判事永井岩之丞の長女である。岩之丞の父は幕臣中の開明派として知られる永井玄蕃頭尚志であり、夏子はその孫娘にあたる。実弟に大屋敦、永井亨などの名士があった。

ちなみにいえば、この岩之丞の同僚に信州飯田出身の柳田直平がいたが、その養子が定太郎と同じ兵庫県出身の民

俗学者柳田国男である。その関係から、柳田は三島の祖母の家庭とは早くからつきあいがあったとのことである（柳田国男「故郷七十年」）。

三島の半自叙伝的小説「仮面の告白」にあらわれる祖母は「猟介不屈な、或る狂おしい詩的な魂」の持主として描かれているが、私はそれをそのまま夏子のこととして読んでいいように思う。彼女の母方は宍戸藩主松平家の息女である。

三島の父梓氏は、前記人名辞典などにおいて「一子梓氏、父に肖て活潑機智にとむ」というように記載されている。明治二十七年の生まれ、開成中学、第一高等学校をへて、大正九年、のちの首相岸信介と同年に東京帝国大学法学部を卒業し農林省に入る。転任、外遊といった高級官僚の常道を歩んだのち、昭和十七年、水産局長をさいごに官界を退き、その後は会社顧問を歴任して、悠々自適の生活を送っている。妻の倭文重さんは金沢前田家の儒者橋家の出身で、その父橋健三は、明治から大正にかけて開成中学校校長をつとめた人である。

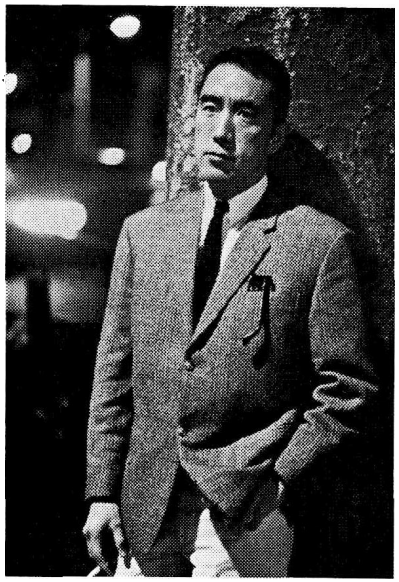
三島は父が農林省事務官の時代、結婚一年後に生まれた。「仮面の告白」の記述をそのまま信用するとすれば、その時三島は六五〇匁の小さい赤ん坊であった。

……

しかし、こうした家系調べは、いかにもこの場合板につかない感じである。現在の三島の読者たちは、多分それらのことに関心はないはずである。すべては、後世の研究者に委ねた方がいいにちがいない。何しろ三島は今もめざましいほどに生きているのだから。

II

三島の青少年期の経歴は、年譜に書かれているとおりである。満州事変の始まった年に学習院の小学生、芦溝橋事件の年に中学生になり、太平洋戦争の開始された昭和十六年にはじめて三島由紀夫のペンネームで創作を書き、翌年高等科に進み、敗戦の前年に東大法学部に入り、戦後の昭和二十二年十一月に卒業している。いいかえれば、昭和の



明治神宮表参道附近で（昭和四十一年四月）

戦争史の歩みに合わせて少年期から青年期を順調にすごしたわけである。兵歴はない。

幼年期から少年期にかけての三島の肖像を通常の伝記風に書くだけの材料を私はもっていないし、それはまたさして必要もないと考える。したがってここでは、たとえば「仮面の告白」「花ざかりの森」「詩を書く少年」など、多少とも自伝的素材を含んでいると思われる作品や、エッセイによって、半ば空想的に幼い三島の姿をモンタージュすることにしたい。

はじめに、私はその祖父や父の経歴から、その生活環境の中に、一種軽躁なまでの快活さ——あの大正期の上流家庭に多少とも共通したブルジョア的陽気さといったものを空想する。そして、他方では、そのコントラストとして、一家の祖霊めいた印象を与える病身の祖母や、その貴族的な血筋につながる夫人たちの、幾らか沈鬱でバセティクな生き方を想像してみたい。これらはすべて空想に過ぎないが、私はたとえばゲーテとか、トマス・マンなどの生いたちに見られる一種悲劇的な生活環境を、三島のために空想してみたいのである。

この空想の当否はともあれ、三島が病弱な子供として育てられたことは事実である。いわゆるお祖母さん子で、中学校に上るまで、祖母のもとで大きくなった。男の子同士の遊びは禁止され、きめられた何人かの女の子だけが遊び相手であった。しかし、彼は男の友達と一しょに乱暴な遊びをしたいと思うのでもなく、むしろひとりで本を読んだり、積木をしたり、画をかいたりするのが楽しかったようである。

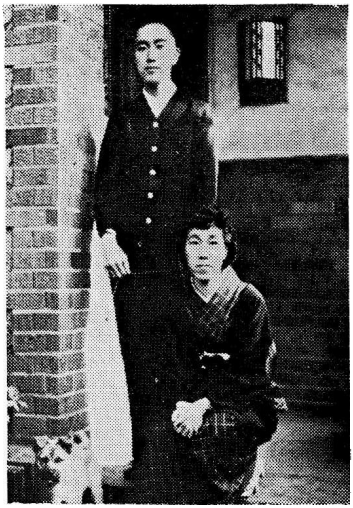
学習院初等科入学当時（昭和6年）

三島は病弱で孤独な子供によくあるように、過剰な感受性と空想力にとんでいた。沢山の絵本やお伽噺——その中には、多分外国製の豪華な本も含まれていた——が、その感受性をいっそう刺激し、空想癖をつのらせたと考えてもおかしくはない。そのころの子供が読むことのできる以上のあらゆる絵本の類を彼は読んだ。しかし彼の嗜好の中には、すでにそのころからある特異な偏愛が潜んでいた。それは不思議に残酷な情景に心をひかれたことである。アンデルセンにも、グリムにも、日本の子供たちには刺激の強すぎるほど、むごたらしい殺しの場面が少なくない。なかでも、虐殺された美しい若者の流す血のイメージは、この子

供の空想を限りなく駆りたて、一種いいがたい官能的な陶酔をさえひきおこすことがあった。

空想の中で、自分が何ものにでも変身することができ、美しい死者にさえも変りうるという甘美な夢想は、おそらく多くの子供たちが一度は経験するものであろうが、三島のそうした嗜好は、多分ふつう以上に強烈であり、またずっとながつづきした。

こうした幼年期の夢想には、多少ともに外界に対する子供の恐れと、己れ自身を夢みるナルシシズムの傾向とが含まれている。外界はお伽噺と同じように自由に子供の幻想の中で変容可能なものであり、己れ自身もまた、巧みな比喩、無意識のうそのように、さまざまにその世界の中で変容することができた。――こうした状態は、多分、この子供がやや大きくなったとき、詩を作る少年に成長してゆく一般的な要因でもあった。



学習院中等科のころ、母倭文重さんとともに渋谷の自宅にて（昭和16年頃）

《……自分のまだ経験しない事柄を歌うについて、少年は何のやましさをも感じなかった。……事実彼のまだ体験しない世界の現実と彼の内的世界との間には、対立も緊張も見られなかったので、強いて自分の内的世界の優位を信じる必要もなく、或る不条理な確信によって、彼がこの世にいまだに体験していない感情は一つもないと考えることさえできた。なぜかというと、彼の心のような鋭敏な感受性にとっては、この世のあらゆる感情の原形が、ある場合は単に予感としてであっても、とらえられ復習されていて、爾余の体験はみなこれらの感情の元素の適当な組合せによって、成立すると考えられたからであった。感情の元素は？　彼は独断的に定義づけた。「それが言葉なんだ」》

（「詩を書く少年」）

こうして、彼の生活は、美しい言葉のアラベスクによって構成されるひゆの世界に属していた。現実の世界を考慮する必要はなかった。ただ彼は「言葉さえ美しければよいのだ」と信じ、「毎日、辞書を丹念に読んだ」。

すべてそのような状態は、一般に文字にしたしむ幼少年期の浄福と名づけてよいものであった。しかし、それだけでは三島の中に早くから育くまれていたもう一つの予感――彼に「憧れと疾ましさと苛立しさ」の気持を抱かせたある別の悲痛な予感を説明するには不十分である。

昭和十五年にノートに書きとめられた「十五歳詩集」の

一つに「凶ごと」という題名をもったものがある。その冒頭だけをひくと——

わたくしは夕な夕な
窓に立ち椿事を待った、
凶変のだう悪な砂塵が
夜の虹のやうに町並の
むかふからおしよせてくるのを、
……

この少年の恐れは、もちろんまたその空想の生み出したものにはちがいなかった。しかし、それは甘美な陶酔感というより、むしろ痛ましい欠乏感ともいうべき色彩をおびていた。いいかえれば、決して自分のものとすることはできないと思われるもう一つ別の世界におけるさまざまな人間や出来事への憧れと恐れの感情に色どられたものであった。「仮面の告白」にあらわれる例でいえば、行進する軍隊、青い股引を穿いた汚穢屋、地下鉄の車掌などは、すべてそうした不可能の世界を予感させるシンボルであり、多分三島の実際の体験から生まれた形象にほかならなかった。

それは、しかし逆にいえば、この少年の内部に醗酵しつつあったある致命的な不適応の予感——自分は何ものにでも変身しうるけれども、決して現実には何ものにもなりえないであろうという絶望の予徴であった。

後年、三島はこうした予感のことを、次のように分析している。

《……私の官能がそれを求めしかも私に拒まれているある場所で、私に関係なしに行われる生活や事件、その人々、これらが私の悲劇的なものの定義であり、そこから私が永遠に拒まれているという悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与ろうとしているものらしかった。

とすれば、私の感じだした悲劇的なものとは、私がそこから拒まれているということの逸早い予感がもたらした悲哀の、投影にすぎなかったかもしれない》（「仮面の告白」）

この拒まれてあるという悲劇的な予感のことは、後に彼が芸術家としての自己を告白するとき、いわば仮面の姿において暗示したものにほかならないが、それはまた実在の三島の幼少年期における内部風景の痕跡であったということはできそうである。

＊

三島の早熟な習作時代は、十三歳の時に始まっている。学習院の「輔仁会雑誌」に「酸模」という創作を発表したのがはじめであるが、それから五、六年の間がいわばその習作活動の開花期ということができ、処女出版「花ざかりの森」が出された昭和十九年秋が、戦前における三島文学の頂点を形づくったというふうに見ることもできそうである。事実、いわゆる三島ファンは、すでに昭和十九年頃には存在していたのである。もとより、それは荒涼たる世相であり、通常の意味での読者層というものもなかった。し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かし、当時勤労動員などにかりだされていた学生たちの間で、三島の名前が口にされることも事実あった。各高校の文芸部あたりで、学習院に三島という天才少年があらわれたという妬ましげな噂があったのも、そのころのように私は記憶している。

三島が、その才能を試みはじめた時代が、恵まれたものであったか、不運な時代であったかは、容易には断言できないことである。そして、その文学のめざめが、以下にのべるような姿をとったことが、三島自身にとって幸、不幸のいずれであったかも、簡単にはいえないであろう。ともかく、それは異常な年であった。世界中に死が君臨し、日本もまた戦争神の不吉な支配下にあった。

十六歳の少年平岡公威が、三島由紀夫のペンネームをはじめて用いたのは、あたかも太平洋戦争開始の直前である。彼はそれまでに前記「酸模」という習作のほか、「彩絵硝子」という作品を「輔仁会雑誌」に発表しているが、後者は新感覚派と堀辰雄とラディゲのスタイルを巧みに綴りあわせたようなしゃれた創作である。当時、学習院で国文を教えていた清水文雄がその才能を発見し、三島を雑誌「文芸文化」同人に紹介するとともに、そのペンネームをも選んでくれた。

この「文芸文化」というのは昭和十三年七月に創刊され、十九年八月、通巻七十号で終刊となった同人雑誌であるが、編集委員は清水のほか、蓮田善明、池田勉、栗山理一の四人で、いずれも広島文理科大学系統の古典主義を立場とする国文学者であった。この雑誌のことは、戦後はむしろ右翼系の雑誌として黙殺されており、調べられたものも二、三しか見当らないが、その文学史上の位置は、少なくとも「日本浪曼派」「コギト」と並列して考えられてよいものであったことはたしかである。後になって、三島が、日本ロマン派の運動が生みだした少数の価値ある作品リストを作ったとき、そのなかに「文芸文化」同人の国文学研究をあげていることからも、ほぼその位置を想像することができるであろう。

ともあれ、三島にとっては、この雑誌を通じて、はじめて時代の混沌の中に己れの才能を展開することができたの

(右) 雑誌「文芸文化」昭和十六年九月号「花ざかりの森」が掲載されている

(左)「少年期の師表」であった孤高の詩人伊東静雄

であり、古典主義とロマンチシズムの交錯と干渉の激動の中に、その美意識の原型となる文体を錬磨することもできたのである。三島は、別に昭和十八年、学習院の先輩であり、文学上の畏友と仰いだ徳川義恭、東文彦の二人と、「白樺の将来は向うをはろうという衒気がないでもない」同人誌「赤絵」を創刊したりしているが、東の夭折のためにそれは二号で廃刊になっている。

三島の「花ざかりの森」は、「文芸文化」の昭和十六年九月号から十二月号にかけて連載されているが、その第一回が載った編集後記には、同人中もっとも熱烈な民族主義者であった蓮田が「日本にもこんな年少者が生れ来つつあることは何とも言葉に言いようのないよろこびであるし、日本の文学に自信のない人たちには、この事実は信じられない位の驚きともなるであろう」と書いており、別に「全く我々の中から生れた」「われわれ自身の年少者」という傍点を付してその登場を讃美し、祝福している。また、その二年後の昭和十八年八月、雑誌「文学」が「古典の教育」を特集したときにも、蓮田は「悉皆国文学の中から語りいでられた霊のようなひと」として三島のことを紹介している。

蓮田はこの一文を書いてまもなく、昭和十八年十月、再度の召集をうけて戦地に向っているが、そのさい、次のような訣別の一首を三島に残している。

《にはかにお召しにあづかり三島君よりも早くゆくことと
なったゆゑ、たまたま得し一首をば記しのこすに
よきひととよきともとなりひととせを
こころはづみておくりけるかな》

これらの詩文から、蓮田がいかに少年三島に期待を寄せたかが想像されるであろう。後のことになるが、蓮田は敗戦にさいし戦地で部隊長を射殺し、自分もまた自決という異常な死に方をした。昭和二十一年十一月に行なわれたその追悼会には、三島も出席して、次のような追悼の文を捧げている。

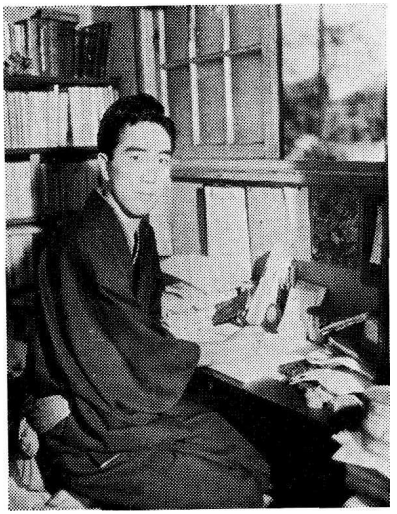
古代の雲を愛でし
君はその身に古代
を現じて雲隠れ玉
ひしに　われ近代
に遺されて空しく
靉靆の雲を慕ひ
その身は漠々たる
塵土に埋れんとす

三島由紀夫

ともあれ、「文芸文化」に登場した三島は、あたかもドイツ・ロマン派におけるノヴァーリスのように、日本古典文芸の恩寵にみたされた精霊のような存在と思われたのであり、また事実それにふさわしい優雅な作品、詩、エッセイの多くを寄稿している。「花ざかりの森」のほか「みのもの月」(十七年十一月)、「世々に残さん」(十八年三月—

十月)、「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」(原題「夜の車」十八年八月終刊号)等の創作、「わたくしの希いは熾る」「かの花野の露けさ」等の詩、「古今の季節」「寿」等のエッセイがそれである。これらの作品のほかにも「赤絵」には「祈りの日記」を書いているが、それらを読む人々は、そこに「やまとことば」の優美な生命が、いかにみごとに駆使されているかを見ておどろくであろう。たとえば懸詞を論じた次のようなエッセイがある——。

《まことにやまとことばはげにもやさしい。蘆間をかよふさびしい水の、たとへば観世水のやうなしづかな水の、蘆の若根にいさよふて立てる漣は、ひたすらに澄みしづまらうとする水面に立てる花やかな波は、かかる方法を以てはじめて可能である。方法といふもおろかにあえかであらう。深紅と白とをあはせて薄紅に桜のあらはれるさうした微妙な生理、かけことばにつづられた優雅な文章こそ、それがそのままやまとことばの五彩の波なのである》(「文芸文化」昭和十八年十一月号)


長篇「愛の渇き」執筆の頃(昭和25年)

後年、三島の文章を織りなしたあの優婉華麗な「五彩の波」が、とおくこうした少年期の言語感覚に由来していることはいうまでもあるまい。日本語の微妙な呪術的ニュアンス、その不思議な光と影の効果というべきものまでを、十六、七歳のこの少年がいかにみごとにとらえていたかは、たんにそれだけをとってもおどろくべきことであった。後年、三島の文体はそれ自体おびただしい変貌をとげるが、「辞書を読む」少年にふさわしく、言葉は彼が世界と角逐する唯一の武器にほかならなかった。

ところで「文芸文化」は、その最初から雑誌「コギト」との交流がさかんであった。いうまでもなく「コギト」は、保田与重郎を中心とする日本ロマン派の源流であり、昭和七年から十九年にかけて、永く歴史を持続した同人誌である。「文芸文化」には保田をはじめ、伊東静雄、三浦常夫、中島栄次郎、田中克己、小高根二郎ら、コギト系統の人々が次々と寄稿している。とくに伊東静雄は、清水らの古い友人として、「文芸文化」の発行自体がその影響下に行なわれたといわれるようなすぐれた詩人であった。こうした関

係から、三島の名は日本ロマン派周辺の人々にしだいに知られてゆくとともに、三島もまた同じ系統の富士正晴、林富士馬らと親しみ、伊東、保田にも面識をうるようになってゆく。それは大体、昭和十八年から翌年にかけてのことで、戦争は次第に破局の段階に入るころであった。

Ⅲ

この当時の生活と気分のことを、少し長いが三島自身の言葉で語らせておこう――

《まず十八歳の私。

戦争が敗戦の兆をはっきりあらわしてきて、東京がいつ空襲されるかわからない時期である。学校へは制服にゲートルを巻いて行かないと門番が入れてくれない。軍事教練が重要な課目になっている。

私はまじめな学生で、知的虚栄心があるから勉強はきらいではない。語学は独逸語だが、学校でいい成績をとる以上に、原書を渉猟したりする必要はないと思っている。どうせ兵隊にとられて、近いうちに死んでしまうのである。それを想像すると時に快さで身がうずく。でも、よく考えると死は怖いし、辛いことは性に合わず、教練だって小隊長にもなれない器だから、何とか兵役を免かれないものかと空想する。人並外れた空想力を持っているので、死ぬ直前に自分が僥倖によって救われて、スリルと安穏と両方を心ゆくまで味わえそうな予感がする。……

歌舞伎や能が好きで、娯楽と言ったら、そういうものを見にゆくのが関の山である。学校で強制される以外の運動は一切やらず、家にいるときは、ただやたらに本を読んだり小説を書いたりしている。読むのは文学書ばかりで、日本の近代小説やら、近世文学やら、中世文学やら、古典文学やら、仏蘭西の翻訳小説やら、勝手気儘に、自分の嗜好に合うものだけを片っ端から読む。それまでは仏蘭西の心理小説にかぶれて、その真似事ばかりやっていたのに、日本浪曼派の緋縅の若武者のような威勢に惹かれて、日本の古典を真似た擬古的耽美的な物語ばかり書くようになる。

私は文芸部の委員長になり、輔仁会雑誌という校友会誌を編集したり……いっぱしの文学青年気取りで、父親の眉をひそめさせた。でも大学は父親のいうとおり法科へ進む気になっていた。どっちにしろ同じことだ。もうすぐ死ぬのだから》（「十八歳と三十四歳の肖像画」）

ここに淡々と描かれたような高校生徒の肖像は、当時の文学好きな青少年たちのそれと多少とも似通っている。一種の気軽な生き方、かすかな悲劇的表情、いくらかの甘美な頽廃、夭折を確信するものの無意識な倨傲――それらがその表情を同じように彩っている。すべてが禁じられているがために、かえってあらゆる空想と耽溺が仮象の美の中で浄められているという印象である。こうした心持から、豊かな才能を駆使して、古典的優雅のパロディを作り出すことは、易々たるものだったかもしれない。そうしてみる

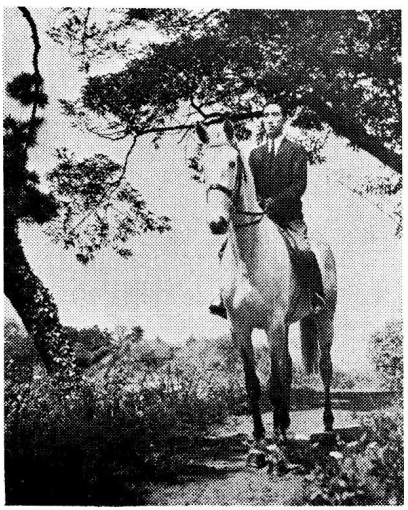
と、三島を愛した先輩たちは、この少年のうちに、やや過剰に優美な古典主義のみを読みとったのかもしれない。——三島の中には、もっと暗い衝動、デスペレートで他をかえりみることのない凶暴な心理がひそんでいたかもしれないのだ。あたかも美しい絵本をよむ子供の心の中に、いかにおどろくべき邪念が浮かんでいようとも、それを大人たちが気づかないのと同じように。たとえば、次のような二つの詩文をよみくらべてみるといいかもしれない。

やすみししわが大皇
おほみことのり宣へりし日
もろ鳥は啼きの音をやめ
もろ草はそよぐすべなみ
あめつちは涙せきあへず
寂としてこえだにもなし
朗々とみことのりはも
葦原のみずほ国原
みなぎれり　げにみちみてり

（「文芸文化」昭和十七年四月号）

《少年期と青年期の境のナルシシズムは、自分のために何をでも利用する。世界の滅亡をでも利用する。鏡は大きければ大きいほどいい。二十歳の私は、自分を何とでも夢想することができた。薄命の天才とも、日本の美的伝統の最後の若者とも、デカダン中のデカダン、頽唐期の最後の皇帝とも。それから美の特攻隊とも。……こんな気ちがいじみた考えが昂じて、ついに私は、自分を室町の足利義尚将軍と同一化し、いつ赤紙で中断されるかもしれぬ「最後の」小説「中世」を書きはじめた》（「私の遍歴時代」）

前者はさりげないほどに端正な古典詩のパロディである。しかし、後者はあらゆる清澄な古典美の反極を流動する不逞な錯乱の思想をあらわしている。ドイツ・ロマン派の生活と芸術を特徴づけたあの高邁なデカダン、神聖な無恥と同じものをそれは暗示している。彼らもまた、もっともロイックな人間的純潔とともに、一切の文明の殺戮者たる血まみれの暴君を夢みた人々である。純潔なマリアへの讃美と、醜悪なソドムへの翹望とをそのまま自己の姿として眺めえた人々である。彼らの生活と芸術を特徴づけるイロ



乗馬は少年時代からの楽しみのひとつ　皇居内旧本丸にて（昭和25年）

ニーという方法は、あらゆる生命の遠心的逸走を一つの美的なアラベスクとして確保するロマン的自我の投影というものにほかならなかった。それは、自我を世界大の鏡に写してみせる美的ナルシシズムの極致であり、現実には世界拒絶の無倫理を可能とする方法でもあった。もっとも簡明にいえば、それは自己の感性の自然に戯れる無心な虚偽の世界観照といえばよいであろう。そして、それは戦争末期において、多少とも青年たちの生き方にふさわしくもあり、また強いられた方法でもあったのである。

三島を日本ロマン派にひきつけたものは、すべてそのようなロマン的心情であったことはたしかであろう。三島の中に、子供のころから認められる拒まれているという意識そのものが、ある異った存在に変身したいというそれ自体ロマン的な熱望であったし、美しい若者の惨死という反極的なイメージに官能的な悦楽を味わうというのも、いくらか病めるロマンチシズムの心理にひとしいものであった。すべてそのような内在的理由が、三島を日本ロマン派の周辺にひきつけ、その異様な熱気の底にひそむ深淵をながめさせたものとみても大した間違いではないであろう。三島はそこに、彼が本能的に感じとっていたあの凶事の危険な美しさがあるにちがいないと思ったのかもしれない。

しかし、少年三島とロマンチシズムとの遭遇には、どこかある偶然の戯れという印象がともなう。あるいは、偶然によって強いられた理由のある錯覚といってもよいかもしれない。勿論、偶然というのは、たまたま三島の青年期が、未曾有の戦争時代と重なっていたということである。そして、戦争の美学には、一切のフォルムの解体という点において、奇態に青年の自意識に媚びるような要素が含まれているものである。

しかし、三島の日本ロマン派傾倒の中には、共感とともに微妙な反撥の要素が含まれていたことも事実である。同じような古典趣味、同じような耽美的傾向、同じようなナルシシズムにもかかわらず、それをとおして三島が美の方法として洞察したものと、たとえば保田与重郎のそれとは、微妙な差異を示していた。いうまでもなく、保田は日本ロマン派の中心人物であり、あたかもドイツ・ロマン派におけるシュレーゲルのような存在として、当時の文学的な青少年たちのアイドルであった。

三島は保田を一回だけ訪問したことがあるというが、その時の印象は、三島の感じた失望感のために、しばしばその回想の中にあらわれている。といっても、それはやや三島の側に過剰な予期があったための小さな思わくちがいにすぎないが、三島としては不思議に忘れられないエピソードであったようだ。

その時、三島は保田に対して、謡曲の文体をどう思うかと尋ねたという。なぜなら——

《私は当時、中世文学に凝りはじめていて、特に謡曲の絢爛たる文体は、うちに末世の意識をひそめた、ぎりぎりの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com